

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～



癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

癒やし処『風月』～愛情漏らし、風香編～

式
フロン

第一章 デトックスマッサージ

第二章 甘い誘い

第三章 いちやいちや愛情漏らし

第四章 おっぱいの騷

第五章 愛情と快楽の焦らし責め

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

第一章 デトックスマッサージ

春は、出会いと別れの季節だという。

人生の転機として、多くの人々が社会生活の中で、新たな環境の中に身を置いていく。

それは、中川智彦にとっても例外ではなかった。

勤め先からの転勤辞令。

都市部の高等専門学校を卒業後、地元の大手の製造会社へと就職した智彦は、契約社員、派遣社員をまとめる立場で、五年間地元の工場へ通い続けた。その間、公私ともに人並みの波乱は経験してきたが、長い目でみればいたって平凡ともいえた。

そして、その生活環境に大きな不満もなく、この暮らしがしばらくは続くのだと、漠然とした考えで日々の生活をすごしていた。

そんな生活を五年程続けた智彦は、昨年公司から地方の工場への転勤を告げられた。

会社からの決定事項として告げられた転勤に当初は現実感がなく、ただ、上司の辞令を黙って聞いているだけだった。

製造会社の現場ではよくある地方への昇格異動。

まさか、自分が対象となるとは思っていなかった人事に大輔は悩んだ。

それから一か月近く智彦は、人間関係、ご近所付き合い、地元への愛着から、辞職も考えたが結果的には、家族や周りの友人へ相談して、転勤を受け入れることにした。

元々、親元を離れて一人暮らしをしていたこと、結婚もしておらず、恋人もいなかったことが決断の決め手だった。

社内では転勤に、前向きに捉えているように見せていたが、実際は、諦めの境地で淡々と引き継ぎと転勤の準備をこなしていた。

それから転勤までの期間、智彦は、引越先の情報調べてみたり、送迎会や親しい友人やなじみのお店へのあいさつまわりをすごした。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

引越しの手続きを済ませた四月、智彦は生まれて初めて、知り合いのない土地へと転居した。

智彦が引越した地方都市は、元居た自宅や実家から、車で約三時間かかる自然豊かな山間の町だった。

隣接する都市は避暑地として有名な観光スポットがあり、智彦の想像や、事前の情報収集での印象よりは、インフラのしっかりとした場所だという感想をもった。

智彦が暮らす会社寮や近くにある職場の工場は、山のふもとにあり町の中心街からは、少し外れた場所にあった。

すでに引越し屋が運び終えた状態の荷を解きながら、初勤務がはじまる来週までには、お店まわりや情報収集をして生活基盤を整えようと智彦は考え、その日はそのまま床についた。



初勤務を翌日にひかえた智彦は、その日引越して初めて、隣接する都市へと足を運んだ。

智彦は自家用車を使い、今日までで、すでに寮がある町の中はあらかた探索を終えていた。

その思ったよりも利便性の悪い環境にやはり、隣の都市部まで、見ておかないと都会育ちとして心が落ち着かない状態になっていた。

都市部は大きな湖のほとりに位置しており、県内有数の観光地のため、大いに、にぎわっていた。

レストランやカラオケ、映画館などの娯楽施設も多い。

軽く観光がてら、入った料理屋で名物のとんかつに舌鼓を打ちながら、智彦はようやく新生活に少しだけ希望が持てる気分になったのだった。

軽く街中を見て回った智彦は、常備薬の確認のためドラッグストアへと足を運んだ。

店内は広く品揃えも充実しているように思える、智彦は毎朝飲んでいる健康サプリメント手に取りながら安堵した。

しばらく店の品揃えをチェックしていると、店内で言い争う女性の声が聞

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

こえて来た。

気になって智彦は声の方へ近づく。

すると店の奥にある薬品コーナーでなにかトラブルがあったのか言い合いをしている女性二人と、途方に暮れたような困った顔をした男性の店員を目の当たりにした。

「この薬は私が電話で予約してたの、そうよね店員さん？」

まるで威圧するかのように、店員に声を張り上げた丸っこい体格の中年の女性に、気の弱そうな男性店員は、言いにくそうに口ごもる。

「それは、たしかに予約はいただきましたが・・・」

「だったら、全部買っても問題ないでしょ」

勝ち誇ったように、氣勢をあげた中年女性に、対面していたマスクをした若い女性が、声をあげる。

「あの、店頭に出てる分とは別に、すでに在庫で確保していると聞いています、私は一つあればいいので、これは買わせていただけませんか？」

そういつて、中年女性の持つカゴの中を指さした。

指をさされた買い物カゴには、箱にはいった同じ薬が十個ほど入っていた。

「はあ？　なんで、知らない人のために返さなきゃならないのよ」

そういつてカゴを背後に隠すようにした中年女性に、マスクの女性は冷静に語り掛ける。

「いえ、店頭に出ている商品を最初に持っていたのは私です、それをあなたが横取りしましたよね？」

そういうと女性は確認するように、中年女性をみてから、店員のほうに目を向けた。

「はい、それは、」

「それは、私が予約した商品を勝手に店員が並べたからよ、人を泥棒のようというなんてあんたどういう教育を受けてきてるのよ？」

店員の言葉に割り込み鼻息を荒く、威圧をするように叫ぶ中年女性に店員が、恐る恐ると声をだす。

「お客様、申し訳ありませんが、この店頭に並べた商品はおお客様の注文分とは別に午後入荷した商品なので・・・」

そんな店員に中年女性が、ヒステリックに叫んだ。

「はあー？　私は店にあるこの薬をすべて買うのでって伝えたじゃないの？」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

いいかげんにしなさいよ！」

マスクの女性は、冷静に店員と中年女性とのやり取りを見ていた。

店員が恐縮したようにうつむき小声で反論する。

「あの、〃現在ある在庫でよろしいですか？〃とお伝えして了承をいただきましたよね？」

その答えに中年女性は、顔を赤くさせた。

「知らないわよ、だったら、午後も入荷するって言えばいいのに、わざと黙ってせこいお店ね、それともあなたの責任なの？」

中年女性のターゲットが完全に店員に移ろうとしたとき、女性が声をだした。

「あの、とにかくその薬、ほかの薬局にもなくて、一個だけでいいのでゆずっていただけませんか？」

冷静さの中にも切実な思いのこもった声に、一瞬場が沈黙に包まれた。

しかし、そんな雰囲気にも、中年の女性がまるで我関せずといった態度で横を向いた。

「嫌よ、なんで私が悪者みたいになるのよ、

これが私一人の分だっと思うのは勝手だけど、私だって介護施設の職員としてこれは渡せないから」

そう告げた中年女性の言葉に、マスクの女性と、店員が、はっとした表情を見せた。

「すいませんでした、薬は諦めます」

そう呟いた、マスク女子に、中年女性は勝ち誇ったかのように、顔をあげ意気揚々とカゴをもってレジへと移動した。

途中、智彦はそばを通った中年女性の顔が、歪んだように意地悪く笑うのを見逃さなかった。

（あの顔は、介護職員というのは嘘くさいな、まあ関わらないほうがいいか）その後、女性へ申し訳なさそうに一礼した店員が、はやく来なさいよと怒鳴る中年に、せかされてレジへと移動していった。

そんな中、智彦は残された女性を何気なく観察する。

「あー、どうしよう、お店今日、休めないかな・・・」

俯いて嘆くマスクの女性は、先ほどの冷静で凜としたイメージから一転し

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

て、背中を曲げる。

猫背になった女性は、智彦は先ほどは気が付かなかったが、なかなか、豊かな身体付きをしており、その胸には、目を見張る大きさが存在していた。

「月夜に代わってもらうのも悪いし・・・どうしよ、ツズズ」

小声でつぶやいていたマスクの女性が最後に、鼻を鳴らしたのをみて智彦は、ある程度事情を理解することができた。

ナンパと間違えられたりしたら、嫌だなと一瞬、どうしようかと迷った智彦だったが、別にそれならそれで恥をかいでもいいやと思いつき、女性に声をかけることにした。

「あの、すみません、よかつたらこれ、差し上げます」

智彦は声をかけると、自分の持っている鞆から、先ほど中年女性が買い上げた商品と同じ商品を取り出して見せた。

それは、智彦が普段から持ち歩いている常備薬だった。

智彦に声をかけられた女性は一瞬、戸惑うような表情を見せた後、じつくりと智彦へと目を向けた。

わずかに跳ねるようなセミロングのヘアスタイルに、マスクの上からのぞく垂れ目気味な目は、マスク越しでも十分この女性が美人だと想像できた。

「いえ、あの先ほどのトラブル？ 少し聞いてまして、たぶんこの商品が欲しいんですね？」

智彦が取り出したのは、花粉症用の鼻炎薬だった。

一部ネットでは特定の人間には、すぐく効果があるといわれている薬で、実際智彦もこの薬の効果で、ひどい花粉症がマシになっている実感があった。

先ほど女性から、お店という単語が聞き取れたことから、おそらく接客関係の仕事なのだろう。

花粉症はひどいと一日中、鼻水が止まらないときがある、男性ならともかく女性でそれはなかなかにつらい、見た感じ女性は目も赤くなっており、かなり重度の花粉症持ちだとうかがえた。

そんな考えを巡らせていた智彦に、女性は少し困惑した様子で見つめると遠慮がちに答えた。

「そうなんですけど、あのいいんですか？」

そんな女性の態度に智彦は軽く流すように答える。

「そんな、大したことじゃないので、この薬、家にいっぱいありますし、ど

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

うぞもらってください」

そういつて渡そうとすると、女性が鞆の中に手を入れたので、慌ててそれを制すように智彦が止める。

「あつ、無料で結構です、お金を出したら、ここに薬置いて逃げます」

そういつて智彦が、薬を床に置くふりをして足を広げて走る準備動作をとる。

その様子に、女性は少し唾然とした様子を見せたが、少しして、口を押さえながら笑い出した。

「あはは、なにそれ、なんですか？ あははは」

大分ツボに入ったのか女性はひとしきり笑うと、目元を指で拭うと、小さく呼吸をした。

その表情の自然な可愛らしさに初対面の智彦は、ドキリと心を高鳴らせた。

「あの、わかりました、それなら遠慮なくいただきます」

ひとしきり笑った後そういつて手をだした女性に、智彦は鼻炎薬の箱を手にした。

薬をもらった女性は少し、頭を下げると背を向けて、薬を口に入れ、持っていた水筒とともに飲んでいようだった。

どうやら相当我慢していたのかと、同情気味に考えていると、女性がこちらに向き直り頭を下げた。

「すいませんお見苦しいところを」

「いえ、気にしないでください」

そう言って、智彦は軽く手を振った。

「じゃあ、自分はこれで」

女性に薬を渡した智彦は、見返りを求めていると思われるのがいやでさっさと退散しようと身をひるがえす。

「あつ、ちよつと待ってください」

そんな智彦の様子に、マスクの女性は慌てて、引き留めるように、軽く智彦の鞆の端をつかんできた。

「あの、お礼をしたいのですが」

真剣な顔つきで女性が頼みこむように言ってきたので智彦は困ったように頭をかいた。

「いえ、あの本当に気にしないでください、自己満足なので」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

そう答えた智彦に女性は、鞆の中に手をいれると、小さな紙を取り出した。「あの、私こういうものなんですが」

無下にするのも悪いと思ひ智彦はそれを受け取る。

「癒やし処、かぜ・・・ふうげつですか？」

女性が渡してきた名刺には、お店の名前らしき、「癒やし処「風月」」と書かれており、住所地や女性の名前が書かれていた。

「はい、私は・・・、そのお店で働いている風香と申します」

軽く頭を下げた女性、風香に智彦は、自分の胸ポケットから名刺を取り出す。

「あつ、ご丁寧に、自分はこういうものです」

身についた習性のように、頭を下げて名刺を渡す。

「ふふっ、ごめんなさい、中川智彦さんですか」

その様子に風香は口に手を当てると、名刺をみてから、もう一度智彦を樂しそうに見た。

智彦は、名刺を渡してから、別に自分は渡す必要もなかったと気がついた。そんな智彦に風香は自分の渡した名刺を指で指した。

「あの、ここ温泉施設なんです」

「温泉」

風香の言葉に智彦は、わずかに声が高まった。

実は智彦は、温泉やスーパー銭湯が好きで休日などはよく一人でつかりに行っていた。

この市街でも何件か、温泉をチェックしていたので、休日には入浴に行くかと考えていた程だった。

そんな興味を惹かれた様子の智彦に風香は熱心に声をかける。

「はい、ほかにマッサージや、食事もできるお休み処なので、よかったらいらしてください、従業員サービスで入浴だけなら無料でできるので」

その言葉に智彦は心が揺れる、しかし特にお返しがしてほしいわけでもなかったので申し訳ないという気持ちもあった。

「えっと・・・」

智彦が断ろうとすると風香が言葉を重ねた。

「私のお礼も自己満足なんです、付き合ってくださいませんか？」

「どこか切実な風香の言葉に智彦は、逡巡する。」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

ここまで熱心に誘われるとさすがに断るのは気が引ける。

それに、癒やし処という名称にも行ってみたいという思いも強くあった。ただ行くとしても、明日から仕事のため色々大変になるので、先の話にはなるが。

迷っている智彦に風香はさらに、誘いをかける。

「あの、無料だと気が引けるようでしたら、割引で対応したいのですが・

・

考えていた智彦に、風香は遠慮していると思ったのか、割引を提案した。

その様子に智彦は、そこまでしてお礼をしたいのかと思いい、ずいぶん義理堅い女性なんだなと苦笑した。

「ふふ、いやそんな熱心に誘ってくれてありがとうございます、わかりました、是非よらせてください」

そんな智彦の言葉に、風香の顔が、ぱっと華やいだ。

「本当ですか？」

「はい、お邪魔します、ですが、かなり先のことになると思いますが」

そう言っ、智彦は今現在引越してきたばかりだということを説明した。

「そうだったんですね、引越して大変なのに……、中川さんは優しい方なんです」

そんな風香の言葉に智彦は照れるように、頭をかくと首を振る。

「いえ、花粉症のつらさは自分も、骨身にしみてますから、それだけですよ」

謙遜する智彦に、風香はそれでも、ありがとうございますと、薬を見せて笑いかけた。

そのマスク越しの笑顔だけでも、今日人助けした甲斐があったなど、智彦はほっこりとした気分になった。

その後しばらく、智彦の会社の話や花粉症の話をしていると、風香が身につけている腕時計をみた。

「あつ私そろそろ、職場に行ってきます、あの中川さん、お渡しした名刺、招待状も兼ねています、入場の際に受付で渡してください」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

智彦は、うなずくと、笑顔で答える。

「わかりました、いつになるか未定ですが落ち着いたらゆっくりと温泉を楽しませてもらいます」

その返事に風香は満足したのかにっこりと笑うと軽い足取りで歩いていった。

智彦は、その場で風香を見送ると、渡された名刺を見つめる。

表には、店の情報が載っており、裏には、シンプルに、風香と記名があった。

名字が載っておらず、名前だけなのが気になったが、お店のルールか何かだと思ひ直す。

今度あったときに名字をきいてみようと考えた。

その後、サプリメントを買い込んだ智彦は、寮へと帰った。

疲れたときの温泉に行く積極的な口実もできて、智彦は今日はいい日だった一日を振り返って就寝した。



「ここか・・・、すごいな、これは思ったより高いお店かも」

約一ヶ月後、智彦の姿は、立派な日本家屋の前にあった。

ドラッグストアでの出来事があった後、智彦は翌日から業務に忙殺される日々となった。

新環境での、仕事は以前とは比べものにならないほど大変で、責任も業務量も増えて大変だった。

日々激務にのまれていく中で、智彦はすっかりと、温泉のことを忘れていった。

そんな中、ようやく仕事についていけるようになったある日の金曜日、知らない電話番号から、ショートメールが送られてきていた。

それは、風香からのメールであり内容は、こちらの近況を心配する内容だった。

けして来店を促すような文言ではなかったが、そのメールに智彦は温泉のことを完全に忘れていたことに罪悪感を覚えた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

そのこともあり、ちょうど連休に入るタイミングだったため、智彦は温泉に行くことを決めた。

メールに明日、伺いますと返信をすると、しばらくして、風香からそれなら夕方頃が一番すいているのでおすすめですと、メールが送られてきたので、わかりましたと智彦は返信をした。

お店は、隣接する観光都市と智彦の住む町の間あたりにある、川沿いをしばらく進んだ山間にあった。

どうやら、別荘地が所々に点在する自然環境のいい場所を選んでいく、山間といっても道路は整備されていて、バス停まであるほど、道も空けていた。

そのひらけた道路を少し脇道に登っていくと、立派な日本家屋型のお店があった。

なかなか広い駐車場に、車を止めて施設を見た智彦の第一印象が、高級そうな店だなという感想だった。

周りに止まっている車も心なしか、あまり見慣れない高級車ばかりのよう気がした。

日が暮れる前の夕方の時間帯、普通の温泉なら賑わっているはずだが、やけに客が少ない、どうやら、かなりの上流階級がくるような店だと智彦は、気後れを感じた。

「とりあえず、入るか・・・」

とはいえ、さすがにここまで来て引き返す訳にもいかないので智彦は恐る、お店へと入っていった。

「いらっしやませ」

日本庭園風の石畳を少し歩いた先の、玄関口へ入り、案内表に沿って靴箱に靴を入れると、受付で若い女性に出迎えられた。

袖の短い和服を着てにっこりと微笑んでいる。

「お一人様でしょうか」

内部は、落ち着いた和装になっており、受付のあるロビーには、他に客が座ってくつろいでいるようだった。

「あ、はい、実はこれをもらったので・・・」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

少し迷った智彦は、懐から、風香にもらった名刺を差し出した。

「はい、拝見させていただきます・・・これは少々お待ちください」

受付嬢は、そう言い残すとカウンターの奥へと引っ込んでいった。

しばらく、店内を観察しながら、待っていると、受付嬢が戻ってくる。

そのまま、少々お待ちくださいといわれ、数秒後、ロビーの奥にある廊下の曲がり角から、着物を着た女性が歩いてきた。

「いらっしやいませ、中川様、お待ちしてました」

ピンク色を基調とした和服。楚々としたたたずまいで、挨拶をした女性に智彦は、目を奪われた。

一瞬、誰かわからなかった智彦は、しばらくして声と目元から、ドラッグストアで菓を譲った女性、風香だと気がついた。

マスクをしていない風香は想像以上に、整った顔立ちをしていた、どこかおっとりとした印象を与える優しい目に母性を感じさせる落ち着き。

着物からもわかる肉付きのいい身体がその癒やしを与える母性を強調するかのようだった。

「どうも、きました」

ぼーっとして意識を奪われた智彦は、適当な言葉で挨拶をする。

風香はそんな智彦の様子に、和服の袖を口にあてる。

「ふふっ、ありがとうございます、おかしいですか？」

そういったざらっぼく笑うとその場で袖を広げてくるりと身体を回転させた。

「いえ、すごい似合ってます、でもこの前とは印象が全然ちがうのでびっくりしました」

本音を伝えた智彦に風香は軽く笑うと、手を握ってきた。

「あの、ここではなんですので、お部屋へ案内しますね」

そう言っ歩き出した風香に、引っ張られるように歩き出した智彦は、ロビーで数人の男性客に注目されているのに気がついた。

心なしか、どこか羨望のまなざしを感じた智彦は、こんなきれいな女性に案内されたらそりゃ、うらやましがられるだろうと思った。

風香は智彦を連れて店内を歩く、施設は思ったよりも広く、その高級な和の雰囲気智彦は、内心すごいところだと気後れを感じていた。

しばらく、歩いて大衆浴場の入り口を、通過した風香に智彦は疑問を覚え

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

た。

「風香さん、そこがお風呂じゃ・・・」

そんな智彦に風香は軽く笑いかける。

「はい、ですが、今日はサービスですので、ぜひ個室用の温泉に浸かっていただけたらなおもいまして」

そんな、風香に智彦は、なにか恐れ多いような気持ちを抱く。

ただでさえ高級店なのに、個室は贅沢すぎる気がしたのだ。

「そこまで」

「気にしなくて大丈夫です、私の自己満足ですから、あ、こちらです」

遠慮の言葉を伝える前に、受け入れられずに

和室の入り口で風香は足を止めた。

そのまま開き戸を開けて中に案内された智彦は、驚いた。

ゆったりとした畳の一室、その奥にあるのは、小さな露天のお風呂だった。

よくドラマや何かで見る個室付きの温泉、それを目の当たりにした智彦は心が躍った。

「あの、ここって旅館もやってるんですか？」

そうたずねる、智彦に風香が、笑って答える。

「いえ、泊まりには、対応してないですね、この部屋は一人がいいというお客様や恋人同士でこられる方専用の温泉付き個室になります」

そう答えた、風香に智彦は顔を向ける。

「気にしないでください、ここは、予約制でして今日は誰の予約もないんです」

先回りしたような言葉を言うと、風香が軽く笑う。

「私が予約したんです、これでも実はこの店の女将なんですよ」

そう打ち明けた、風香に、智彦はなるほどと妙に納得した気分になった。

受付の女性とは明らかに違う、格式の高そうな和服を見て、智彦はなんとなく風香が責任者のような立場であると察していた。

「やっぱりですか、なんとなくその姿を見た瞬間そうかなと思ったんです」

正直に答えた智彦に風香は、上品に笑った。

「ふふっ、よかったです、それなりに威厳がありました？」

「少なくとも自分には、従業員には見えなかったですね」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

そう答えた智彦に風香がゆっくりと近づいてきた。

胸元に顔を近づけると小さくつぶやいた。

「ありがとうございます、あの、お風呂に入る前に、すこし汗を流しませんか？」

誘うような声音をはらんだそのつぶやきに智彦の心臓が一瞬はねる。

「えっと、汗ですか・・・」

ゆっくりと後退する智彦のワイシャツに手をおいた風香が目のをのぞき込む。

「はい、気持ちよくこちらの温泉に浸かる前に、ぜひ私のマッサージで身体を整えてほしいなど」

そんな風香の言葉に、わずかだが、エッチな妄想をしてしまった自分を智彦は恥じた。

しかし、これでは至れり尽くせりだ、温泉だけでもありがたいのにおまけにマッサージまで、それも女将にしてもらうとは、さすがに気が引ける。

ただ、やはり風香ほどの美人からマッサージを受けるチャンスなんてそうそうない気がする、智彦はそんな抗いたがい誘惑にかられて、考えたあと妥協案を提案した。

「すごい魅力的なのでぜひお願いしたいのですが、さすがに申し訳ないので、マッサージは別料金でお願いします」

そう、答えた智彦に、風香は少し驚いた表情をみせたが、ワイシャツのボタンに手をかけた。

「わかりました、ですがマッサージの料金は受けてから決めてもよろしいですか？ お身体に合わなければさすがに申し訳ないので」

そういって、ゆっくりとワイシャツのボタンを外す風香にドギマギしながら、智彦は、軽くなずいてしまった。

「ふふっ、ありがとうございます、では準備をしますので、あちらで服を脱いで待っていてください」

ワイシャツのボタンをすべて外した風香は、部屋の左手にある温泉につながっている脱衣所らしき場所へ手を向けた。

脱衣所で、ワイシャツを脱いだ智彦は手を止めた。

どこまで脱ぐのが正解なのか、普通のマッサージ店なら、替えの服が用意されている、ふと見ると、おそらく入浴後に着るのであろう店内着の浴衣が

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

置いてあるのに気がついた。

智彦は、パンツの上からそれを羽織る

室内からなにやらふすまを開け、物を運ぶ音が聞こえてきた。

しばらく準備をする物音が聞こえた後、どうぞという声が聞こえた。

智彦はわずかに緊張しながら、ふすまを開けて中へ入っていく。

室内は先ほどの部屋に床置き、分厚いマットレスが用意されていた。

よく見ると頭の部分がへこんでおり、どうやらマッサージ用の簡易ベッドのようだった。

そのそばに、風香が膝をついて、落ち着いた笑顔で迎え入れる。

「中川さん、浴衣は着なくても大丈夫ですマッサージなので下着だけでお願いします」

そう言っつて、風香は近づいてくると、ごく自然に智彦の浴衣を手慣れて手つきで脱がしていった。

あつという間に、ボクサーパンツ一枚になった智彦に風香がマットレスへと誘導した。

「じゃあこちらうつ伏せになってくださいね」

服を脱がされて恥ずかしいと感じる間もなく流れるようにうつ伏せにされた、智彦は心地いいマットレスの感触を抱きながら、どんなマッサージをされるのだろうか、期待に心臓を弾ませる。

顔をくぼみに入れて下半身一枚で、うつ伏せになった智彦の身体にふわりと一枚のバスタオルが掛けられた。

その上から全身をなじませるように、両手がなでるようにすべっていった。「今日は、どこが一番お疲れですか？」

耳に心地よい囁きが響いてくる。

「そうですね、やっぱり、足と腰が最近、特に疲れてますね」

そう、返した智彦の背中が軽く指圧された。

「わかりました、じゃあ下半身を重点的にほぐしますね、その前に少し全体をほぐします」

風香はどうやら最初は全身から揉みほぐすようだった。

首筋がつかまれて心地よい強さで揉まれていく。

筋のこわばった部分がやさしくほぐされていく感覚に智彦は、風香のマッサージが相当レベルの高いものであると理解ができた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

首の付け根から、肩へと手が降りる両手がわしづかみにするように肩をぐつぐと揉むと頭から血が降りてくるような心地よさを感じた。

「どうですか、力加減は？」

「丁度いいです、すごく気持ちいい」

智彦は何度かマッサージを専門店で受けたことがある、しかし女性のマッサージでここまでしつかりと強めに揉んでくれる人はいなかった。

多少の強さがいい気持ちだと感じる智彦にとって風香の強めのマッサージが身体に合う。

「ふふっ、よかったです」

そう囁きながら、首筋がほぐれるまで揉んだあと、背中へと指圧が移る。

肩甲骨あたりから、ぐぐっと力を入れて心地のよいリズムで指が押される。

「あの日は本当に助かりました、結構重要な接客があったんです」

肩から背中へ指圧を受けながら、この間の出来事を話しかけてきた風香に智彦は、無言で耳を傾けた。

「こうしてお礼ができてすごく嬉しいです」

「そんな、こちらこそありがとうございます」

心のこもったような指圧と共に、そう言われて智彦は、申し訳なさど感謝を感じた。

「それに、単純に中川さんに好意を抱いたというのもありますよ」

「ふっあ、それは、お世辞でもつうれいです」

緊張をほぐすためか、からかうような口調でそう言った風香に、

指圧でこわばった背中中の筋肉をほぐされながら智彦は返事をする。

「無理に声はださなくてもいいですよ、ふふっ、お世辞じゃないですよ、普通ならお礼でもここまでやりませんから」

優しい声で意味深に囁かれ、心まで持つて行かれそうな心地よさに浸る。

ゆったりとした時間の中で、智彦の息をはく音と、たまに力を入れる時にもれる風香の息づかいだけが室内に響いた。

背中中の指圧を何度か繰り返すと、腰骨のあたりを今度は重点的に揉みほぐされる。

じつくりと時間をかけて揉んだ後、臀部へと指が伸びる、腰近くのお尻をグーと指で押さえて硬くなっている筋を圧迫される。

硬さがとれるまで押さえて、片側が終えると今度はもう片方がほぐされた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

腰と臀部を手のひらと、指を使って、徹底的にほぐされた智彦は、じんわりと全身から汗が浮いてくるのがわかった。

「汗、出てきましたね」

つぶやくように囁いた、風香が一度全身を拭うように汗を拭き取った。

臀部をおえると、バスタオルを右足全体に掛け、股の付け根が指で押さえつけられた。

「あっう」

睾丸の真横をぐっと両手の親指を使ってタオルの上から押される、女性の細い指だがその強さは男性並みであるためか、身体の奥まで指が沈んでいくような感覚を覚えた。

そのまま、指を離さずに押さえ込まれると睾丸を中心に熱が下半身全体へと伝播する。

下半身からはさらに発汗が促される。

智彦は睾丸がドクドクと脈を打ち、ベットに押さえつけられた男の物が、膨張の兆しを見せているのを感じ取った。

「汗がすごい・・・、疲れがすごくたまってますね」

強く股間の付け根を押さえながら、風香は心配するような声をだした。

「っはい、引っ越しと、っん、なれない転勤で、だいぶ忙しかったので・・・」

智彦の言葉に風香は、さらに指を強く押さえると、語りかけた。

「っん」

「これ、もう少し本格的にやりたいです、この疲れはあまり身体によくないですよ」

「そうっ、ですかっ」

「はい、温泉浸かった後もデトックスした方がいいですよ、もう一度いかがですか？」

温泉へはいった後も施術をしてくれるという風香の提案に、一瞬智彦は考えを巡らせた。

身体は風香が心配するほど、疲れているらしい、しかしそこまでやってもらうのも、どうなのか。

「はっうっ」

考えを巡らせていると、風香の指が睾丸の付け根をぐりっと押さえつけた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

先ほどとは違う種類の高まりが股間をゆっくりと流れる。

「どうですか、入浴後もやりましょう？」

低い囁きと共に睾丸につけた指が妖しくふるえた。

返事を促すように、甘い振動が睾丸をゆすると、智彦の思考がぼやけた。

「は、はいお願いします」

よくわからないうちに、言葉を返した智彦の、睾丸から指が、少しずつ太モモの方へと移動した。

「ふふっ、ありがとうございます」

どこかいたずらっぽい声色で風香が笑うと、指先が太モモへ移動して筋肉をじっくりと揉みほぐしていった。

臀部の下から丁寧な右足の太モモをほぐす。

何度も指先を往復させ張りをほぐしきると、今度はふくらはぎへと指を這わした。

同じようにふくらはぎを丁寧に揉み込む。

「うっ、いい」

かなり筋が張っているのか、強い風香の指圧に声がでてしまった。

「我慢してくださいね」

優しくたしなめるように語りながらも、その指圧の強さは弱まらない。

「うう、はい」

痛い、どこか心地のいい痛みなので、智彦は素直に返事をした。

「ふふっ」

小さく艶のある笑いをもらった風香は、指先を強めたまま、何度もふくらはぎを押しつける。

「あっあ」

どうしても抑えきれない、智彦の声に合わせるように強く、指が筋肉に食い込んでいく。

「もう少しです、我慢、我慢」

からかうような言葉と共に指をリズムカルに押されていくと、だんだんと痛みは引いてきた。

痛みが薄れると、風香は足首を持ち上げ、クルクルとストレッチのように付け根から回した。

右回転、左回転させて、足首をほぐす。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

ようやく、右足がはなされると、バスタオルはかなり汗で湿っていた。風香はそのバスタオルを、折りたたむと用意してあった、新しいタオルと交換する。

「じゃあ、今度は左足にいきますね」

新しいタオルを左足全体にかけると、先ほどと同じように、股間の付け根へと指を這わせた。

◇

「あー、最高だ、天国かなここは」

身体を岩で囲まれた、浴槽に浸からせて、智彦は歓喜のため息をついた。

風香の本格的なマッサージを徹底的に受けた智彦は、全身汗だくになった後、ようやく解放された。

施術後、風香はにつこりと笑みを浮かべると、温泉に行くことを許可した。本来の目的だったはずの、温泉に気持ちを高ぶらせた智彦の背に、ゆっくりつかってくださいといいながら、露天とつながっている部屋の障子をしめていった。

ほぐれて、発汗した身体を備え付けのシャワーで流して、ボディソープで洗う。

きれいに全身を洗った後、頭を洗った智彦は待望の露天のお風呂につかり、大きく息をはいた。

空は薄暗くなり、あたりは静寂が包む、お湯が流れる音だけが鼓膜震わせて、心地のよい癒やしを与える。

マッサージを受けたおかげで全身に、源泉の効能が身体の芯まで染み渡っていきような心地よさを覚えた。

都会の喧噪では味わうことのできない、贅沢な時間を満喫する。

待望の温泉入浴は、マッサージのおかげもあり、リラックスして、癒やしを与えてくれていた。

それと共に、智彦はこの後待ち受ける、デトックスという施術にかなり期待をよせていた。

ここまで、贅沢なおもてなしなど、今後の人生で受けることもないと考えたと変に遠慮しないほうがいいのではないかと考えてしまう。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

しばらく、そんな幸福なひとときを噛みしめながら智彦は一人露天で黄昏れていた。

露天を十分満喫した智彦は、脱衣室へと戻ると、用意してあった浴衣へと着替えた。

髪の毛をドライヤーで乾かした後、和室の襖をあけた。

室内は、カーテンが敷かれており、薄暗い照明の中、先ほどのマットレスが敷かれていた。

その横にはカゴに入った液体が置いてありタオルがきれいに折りたたんで重ねられている。

風香が、入り口で待ち構えていたかのように、襖をあけた智彦の手を握った。

「お疲れ様です、ゆっくりできましたか」

「わっ」

「？」

一瞬獲物に捕らわれた錯覚に落ちた智彦は、笑顔で不思議そうに見つめる風香に、正気にかえったように平然を装った。

「はい、ここ数年で一番贅沢な時間でしたよ、ありがとうございます」

「よかったです、では、さっそくデトックスをやっていきましょうか」

そう言うと風香は、智彦をマットレスへ仰向けで寝かせた。

その足下に風香が移動すると、智彦の足首を持ち上げて、自身の膝の上へと乗せた。

「最初は、足つぼマッサージです」

そうつぶやくと手のひらに数滴のオイルをなじませて、右足全体へと塗り広げていった。

ゆっくりとオイルを馴染ませると、土踏まずのあたりを重点的に強く押してくる。

「痛っ」

「この辺は、消化器官に効くみたいですよ」

耐えられないレベルではないが、足を反射的に逃そうとするほどの痛み。

「だめですよ」

口調は優しいが、足を動かそうとしても、全くびくともしないぐらい、風

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

香の押さえる力は強い。

ゴリゴリと指で痛いと感じるツボが押され続ける。

「いたたた、痛い」

「うふふっ」

足をがっちり固定し、笑いながら、足をいじめる風香に、智彦は額から汗をながして微かな畏怖を感じていた。

痛みを覚える強烈な足ツボにもだえていると少しずつ痛み慣れてきたのか痛覚が薄れてくる。

「ここが、次にやるリンパ腺のツボですね」

風香はそういうと今度は指の付け根を丁寧に揉みほぐしていった。

「老廃物がたまっているので、流れやすいように身体全体をもっと定期的にメンテナンスしたほうがいいですよ」

優しいアドバイスをする風香に、足ツボを押され続けると、だんだんと、身体全体がぼかぼかと暖かくなってくるような気がしてきた。

右足が終わり、左足も同じように、ツボを押されていると、いつの間にか、仰向けで寝ている智彦の、股間がゆっくりと起き上がっていく。

浴衣の下からでも、わかるくらいに膨らむ股間にどうか押さえようと、智彦は数学的なことや仕事のことを考えてごまかそうとしたが、意思とは、裏腹に股間は、膨らむ一方だった。

足ツボマッサージの最中に、明らかに一目で勃起しているとわかるほど股間を膨らませた智彦は、はずかしくなり、両手をさりげなく、股間へと覆い被せた。

「ふふっ」

低く、笑った風香の声が、耳に強く響く。

お見通しと言われているような羞恥を感じながら足ツボを受ける、痛みがくればまた勃起が収まるかもしれないと思った智彦に、しかし、下半身全体がジワジワと暖かくなる刺激しか与えられなかった。

「中川さん、そうなってしまわれるお客様は大勢いらっしゃいます、はずかしがらなくても大丈夫ですよ」

どこか羞恥で心が落ち着いていなかった智彦に安心させるように、風香が言った。

「そうですか・・・」

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

「はい、だから手をどけてくださいね」

優しく進言された智彦はその言葉につられておずおずと両手を元の位置へと戻した。

「そうそう、堂々としていてください、それが一番リラックスできますよ」
そう言って、足のかかとの上を重点的に、指で刺激する。

一押し一押しされるたびに、股間に血が集まり、ジワジワと精液が陰囊でつくられるような感覚を覚えた。

それに合わせて、股間が浴衣の上から持ち上がっていく。

異様なほど勃起してきた陰茎にしかし先ほど、手をどかしたばかりなので隠すこともできない。

智彦はあまり下を向かないように目を閉じた。

「っ痛っつ」

そんな智彦に一瞬急激な痛みが襲う。

反射的に下を向いた、智彦だがその時点ですでに痛みは引いており、強調された勃起だけが視界にうつっていた。

「痛いですか？」

そんな智彦に風香が、痛みを感じたツボをなでながら囁いた。

「下はこんなに元気なのに、内部の循環がよくないですね」

そう言ってグリグリと強く押されると、声が思わず出そうになるほど痛みを感じた。

しばらく、足ツボを揉みほぐされ、悶絶を繰り返した後、足がようやく解放された。

大の字になり、荒く息を乱した智彦の、浴衣の帯を風香はさりげなく、ゆるめていった。

「大丈夫ですか？」

やさしく聞きながら、浴衣をはだけて、さわさわと智彦の太モモを撫でさせる。

「は、はい」

そんな風香の行為に、智彦は痛みを忘れてドギマギと鼓動を高まらせた。

「次はリンパを流すので、鼠径部をマッサージしますね」

風香はそう言うと、智彦の太モモを持ち、開脚させた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

その間に正座をして、智彦の太モモを抱えてぐいっと、自分膝に乗せるような体制にした。

「ちよっと、風香さん」

あつという間に、風香の目の前で、下半身をさらされた智彦は戸惑った声をだす。

はだけた浴衣の間には、黒いボクサーパンツがこんもりと膨らんでいた。

「はい、なんででしょう？」

優しく語りながら、両手の指をゆっくりと、パンツの裾口から、するりと侵入させた。

「ひっ」

指は鼠径部と呼ばれる足の付け根、睾丸の横の筋をするすると撫でさすった。

「ここを、マッサージします、この体勢はつらいですか？」

そう聞きながら、両手の親指を睾丸の付け根へと、這わせると、根元から、股間を持ちあげるようにしてグリグリと指を押し込んだ。

その刺激に、下半身がもちあがり、陰茎が跳ね上がった。

「い、つらくはないですけど、これは・・・」

グリグリと、下半身を風香の目の前に持ち上げられ、勃起をさらされる羞恥に、智彦は口ごもる。

「恥ずかしいですか、ふふっ、マッサージでこんなに、大きくさせてますものね」

からかうような声音で答えた風香は、親指をはなすと、残る四本の指で鼠(そ)径(けい)部(ぶ)をさわさわとくすぐった。

「はっひ」

声をあげた智彦に風香は、にっこりと笑いかける。

「でも、まだこれからですよ、鼠径部はしっかり流さないと、老廃物が流れません」

そう言って、股を外側に押すようにして、親指でぐっぐつと、付け根を押した。

「ううっ」

指が身体に食い込むたびに、膨らみが上下にゆれる。

何度も何度も、鼠径部を指で指圧された智彦のボクサーパンツにじんわり

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

と染みが広がっていった。

「あはっ、漏れてきましたね」

カリッと爪を鼠径部に立てられて、微かな痛みにも、下を見た智彦に、嘲笑するかのように笑った風香が広がっていく染みを指摘する。

そんな、風香の小悪魔的なおりに、智彦は顔を真っ赤にさせた。

どうも、先ほどから風香は智彦の羞恥をあおるような態度をとる。

ここにきて、智彦はようやく風香の、嗜虐的な性格に気がついた。

「あの、風香さんって、もしかしてSな人ですか？」

そんな智彦の質問には、どこか冗談としてこの、少し淫猥な空気を変えようとする意思も混じっていた。

そんな智彦に、風香はにっこりと笑うと、睾丸を付け根から挟むように内側へ押しつけた。

膨らみが、そりたつと、染みがみるみると広がっていく。

「ごまかしてもだめですよこんなに、ぬらしちゃって」

そういいながら、手を緩めず、膨らみは上下運動を激しくさせた。

「ごまかして、なんて」

「これ以上、濡らしたら、おもらしですよ」

そう言って、整った顔を股間へと近づけた。

その瞬間、智彦に理解できないほどの強烈な羞恥が襲った

顔を徐々に赤く染まらせる、智彦に風香がさとするように、言った。

「脱がしちやっついていいですか、パンツ」

いいながら、ボクサーパンツの布地を持ち上げると、勃起して濡れた先端に布をあてて、ゆるゆるとすべらせた。

「あうっ」

「おもらし、止まりませんね、ぬれたパンツで帰ることになりますよ、ぬぎましょ？」

煽るような言葉と先端を、ボクサーパンツでこすられて、智彦は羞恥で顔を真っ赤にした。

股間には、染みが大きく広がったパンツがさらされて、陰茎が、睾丸の付け根をゆさぶられ、大きくふるえる。

抵抗しようにも、マッサージでほぐされた身体と淫靡な雰囲気にもまれて智彦は動くことができなかった。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

風香が微笑みながら匂いを嗅ぐように、鼻を股間の先に近づけたとき智彦は、観念するように首を縦にふった。

「わ、わかりましたからっ」

「ありがとうございます、うふふっ」

そんな、智彦に、一瞬勝ち誇ったかのような表情をみせると風香は素早くボクサーパンツを足の間から脱がせていった。

ふるんと一本の陰茎、ペニスが、浴衣の間から勢いよく飛び出る。

二、三度揺れたペニスが下腹の近くで勃起をさらした。

眼前で、涙を流すように先端がぬれたそのふるえる屹立に、風香の目が細められた。

口元に微笑みをたたえながら、風香がつぶやく。

「ちよっと被ってるんですね、ふふっ」

嘲笑、しかしどこか優しさの混じった指摘に智彦は、顔を背けるほどの恥ずかしさを感じた。

ペニスは先端部分が少し剥けた状態で、亀頭の大半が皮に被われていた。

仮性包茎、智彦の長年のコンプレックスであり、女性経験が少ない原因の一つでもある。

その弱点をさらしてしまった智彦は、自身のうかつさに後悔をする。

「そんな気にしないでください、私はこういうかわいい、ペニス好きですよ」

「ふ、風香さん！」

智彦は気にしている、包茎をフォローされたことより、風香のそのあけすけな言い方に衝撃を覚えた。

次の瞬間、風香の口元がペニスに近づくと、軽く息を先端に吹きかけた。

「ひっ」

「ふふっ、じゃあ、鼠径部のマッサージにうつりますね」

その衝撃的な行動に啞然としている、智彦をまったく、気にせずに風香はマットレスの横のローションを手を取った。

未だ、吐息の影響で、透明な液を垂らしながらふるえるペニスを、無視して風香はローションを智彦の足の付け根にトロトロと流し落とした。

「ああっ」

智彦が声を上げる。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

股間の付け根に冷たい感覚がながれ、鼻孔にどこか甘い香りが漂ってくる。ぬちゃぬちゃと、淫猥な音がして、目を向けると、微笑みながら、手にローションを馴染ませる風香と目が合った。

「これ、アロマ入りローションなんです、すごく気持ちいいと思いますよ」
につこりと微笑みながら語る風香は、まるでなんの邪心もないかのように見える。

ぐちゆりと両手が、鼠径部に這わされると、ぬるぬると手が足の付け根を甘くぬめらせた。

「ひゃああ」

気持ちよさにもだえながら、しかし智彦は風香の無邪気な顔の裏にある、明確な意地の悪さにさすがに気がついてきた。

風香はじつくりと目を合わせるように、観察しながら、両手を鼠(そ)径(けい)部(ぶ)にすべらせる。

ペニスがびくりと大きく反応する場所があるとそこを重点的に、指先ですりつけて気持ちよさで、智彦が顔を持ち上げると睾丸近くに爪を立てて、視線を促すような指使いに変える。

「ふ、風香さんさつきから、意地悪してませんか？」

羞恥を感じながらも、タラタラと先走りを流すこの状況に耐えきれず、智彦は思いきって風香に聞いたのだした。

「意地悪ですか、どこがでしょう？」

軽く首を傾けながら、逆に風香が質問を返す。

勃起状態で、性感を煽り焦らしてくる所ですと、正直に言いたい智彦だったが、その後にくる風香の答えが大体予想がつき、なにも返せない。

風香の立場からこの状況はマッサージだと主張して勝手に、感じている男が悪いと言えばそれまでだ。

「どうあがいても、勝てる要素のない、言い合いになる。」

そんなことを考えていると、風香が再び、ローションを追加して、先ほどよりさらに責め立てるように睾丸の周りに指をすべらせた。

「あうう」

「老廃物と一緒に余計な考えも流しちゃいますね」

どこか、凄みのある低い声で囁いた風香が、指に力を込める。

明らかに先ほどとは違う、本気の指使いが智彦を襲った。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

「は、ひゃ、なに」

親指二本で睾丸の根元を持ち上げるようにツボ押しした風香は残りの八本指で、くすぐるようにリンパ腺を刺激する。

ペニスの先端から汁がピツと飛び散った。

しばらく、くすぐり続けたあと、風香が手を離すと、睾丸を中心に下半身が弛緩する、その瞬間、両手を手刀の形にして、その側面でなんども、ローションでぬるぬるの鼠径部をすべらせた。

一度も、直接接触されていないにもかかわらず、智彦のペニスは腫れ上がり、ビクビクと血管を浮き立たせる。

包皮が半分剥けて、真っ赤な龟头が顔を出す、その先からは汁が流れ、皮の間にたまり、あふれて竿へとだらだらと流れていった。

脳が焦れつたさに、支配される。

智彦の頭の中で、射精したい欲求が強烈に膨らんでいった。

風香はそんな、智彦の焦れた感情を、煽るように何度も何度も、鼠径部を指で愛撫する。

その、甘い焦らし責めに呼吸を荒く乱した智彦に風香が、囁いた。

「ふふっ、智彦さん老廃物すべて、流しきりたいですか？、こ・こ・こも」

甘い誘うような声が、耳朶に響き、同時に睾丸ごと、ペニスがゆすられた。

そんな風香の誘惑に、智彦は、思わずうなずいてしまった。

もはや、名前で呼ばれたことすら、気がつかずただ快感を求めるように何度も首を縦に振る。

「いいですよ、ただし条件つきです」

「条件ですか・・・」

条件という言葉に、智彦が警戒するように答えた。

そんな、智彦に風香が親指二本を陰囊の上において囁く。

「はい、一つは、今日の料金はすべて無料にすること」

その言葉に、智彦は、眉根をよせた。

入浴や身体を徹底的に癒やしてくれたマッサージだけでも、一万払っても、足りないくらいなのだ、さらにこんな、甘い快楽を提供されたらどんな言い値でも払う覚悟は智彦にはあった。

「そ、それは」

至れり尽くせりの過剰すぎるサービスに智彦は一瞬快感を忘れて、強い感

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

謝を超えた後ろめたさを感じた。

「だめです、無料でサービスさせてもらいますね」

風香はそう毅然とこたえようと、陰囊に乗せた親指を立てて、爪先でカリカリと睾丸をひっかいた。

「でも、風香さん、満足してるので、料金はちゃんとはら、あつう」

対価は払うと、そう反論する智彦の、下半身が甘い波に襲われた。

指先が自在にリンパ腺をくすぐり睾丸が、くりくりと弄ばれる。

ペニスがビクビクとふるえて、大量の先汁をまき散らした。

「無料でうけますよね？」

囁きと共に、陰囊の親指が這うように下へおりた、睾丸の真下、会陰と呼ばれる肛門との間に指がたどりつく。

そこをぐりぐりと押された、智彦に脳内から、よだれがこぼれそうな錯覚を覚えた。

「いつ、わかりました、受けます、無料で」

そう答えた、智彦に、風香は会陰部に指先をすべて集めてきた。

「もう一つは、かならずまた、お店に来ること」

そういいながら、十本の指先で、さわさわと会陰をなで回す。

とかすような指使いに股間全体が、ビクビクとふるえる。

人生で一番と思えるほどの快感を流し込まされた、智彦はただ下半身をふるわせるしかない。

「そ、そんなの、当たり前です、何度だって来たいです！」

快感に翻弄されながら、本音が出てしまった智彦に、風香が微笑んだ。

「あつ本音っばいです、うれしい」

そうつぶやくと、ご褒美とばかりに、睾丸を左手で持ち上げて、右手の指先で器用に会陰部を引っ掻いた。

「あつうう、」

あごをあげて、もだえる智彦にしばらく、カリカリと会陰をくすぐり続けた後、風香はゆっくりと指をはなした。

あまりの快楽に、もだえていた智彦はいざ指が離れていくと、強烈な名残惜しさが股間を支配した。

その感情のまま、物欲しそうな顔をした智彦に、風香が指先を見せるようにして、なめらかに空中で引っ掻く動作をした。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

「エッチですね」

そう囁いた風香の頬が赤く上気していた。

最初の姿とはまるで違う、色気があふれ出るような表情をみせる風香に、智彦の心臓がバクバクと高鳴っていく。

心臓をわしづかみにするような妖しい笑みをたたえると風香が囁いた。

「じゃあ、気持ちよく老廃物流しちゃいますね」

そう言って、指先を股間に近づけられ、期待にペニスがビクビクとふるえた。

白く細い左手が、陰囊を持ち上げるように、やんわりと指先でつかんだ。

「智彦さん、大きく呼吸してください、一緒におなかと、ここに力をいれてみて」

風香は囁きながら、持ち上げた陰囊の下に右手の人差し指の先をつけて、ここですと、マーキングするようにクルクルとまわした。

「はっ、はい」

返事をした智彦に、右手の指を会陰からはなした風香が、いきますよと声をかけた。

「吸って」

風香の言葉に従って、智彦は呼吸と同時に股間に意識を込めてみる。

下腹から下の陰茎と陰囊が持ち上がる、同時に睾丸がジワジワと左手に握りこまれた。

せり上がり、あつくなった陰囊が手の中で二つの玉をコリコリと転がされる。

「吐いてください」

快感で息をはこうとした瞬間、そう指示をだされ無意識にしたがってしまった。

息をはいたと同時に睾丸の締め付けがゆるんでいく、同時にその下にある会陰が左手の指二本で、グリグリと押された。

「ふっ、はああう」

呼吸と同時に快感に声もれる。

「繰り返してください」

冷淡な声でそうつぶやいた、風香の左指が再び、陰囊を五本の指先でわしづかみにした。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

その言葉に、呼吸を開始して、股間に力を込めると、合わせて引っ張るように睾丸が握られていく。

その感覚にじわりじわりと会陰部に下半身全体から、血が集まってくる。まるで、股間が急いで精子を製造しているような感覚を受ける。

智彦は呼吸が限界まで、来たのでゆっくりと息をはいた。

睾丸をひっぱる左手がほじめていく。

ぐにゆりと、高められた会陰部が指先で揉み込まれた、瞬間じわりじわりと、そこから竿に向かって何かが上り詰めた。

ペニスの先の尿道口がパクパクと開き、ぷつと透明な液を吐き出した。

「ふふっ、まだですね、息を吸ってください」

そう言っただけで、息を吸って、不安を覚えた。

握られた陰囊に合わせて、深呼吸をしながら、智彦はまさか、睾丸の刺激のみで射精させようとしているのではないかと、焦る。

しかし、考えている間も、翻弄するかにリズムカルに睾丸を揉まれる。

「心配しないでいいですよ、どうせもらしてしまうんですから」

智彦の考えを読み取ったかのように、囁いた風香が、左手で二つの玉を転がすと、袋ごとひっぱった。

「いつひっ」

声を出したと同時に、息をはいた智彦の皺袋から手を離れた風香は、会陰に左手の指二本を這わせてグリグリと押しつけた。

先ほどと同じ、強烈なほとばしりの予兆、しかし、尿道を通る感覚は、ギリギリのところまで本流までたどり着かない。

ぴゅぴゅつと透明な液体だけが飛び出して、竿が空打ちのようにビクビクとふるえる。

「あ、ああ」

でそうで、出ない感覚、智彦はさすがにこのままでは、射精できないのではと考えた。

生まれてこの方、夢精を除けば、竿の上下運動以外で射精などしたことがない。

いくら、精子をためようとも最後のピストンがなければ男は出せないと智彦は思っていた。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

本能は動物の交尾と同じで抽送を望んでいるのだと。

「風香さん、これ、このままじゃイケません・・・」

弱音のように絞り出した智彦に、風香は目を合わせると、右指をペニスへと伸ばす。

右の指先で、ペニスの先からこぼれた液体をすくい取ると、粘度をたしかめるように、指先で弄んだ。

そのまま、チロリと舌先でなめとり、舌が唇を一周した。

その光景に、智彦のペニスがビクビクとはねた。

強烈な色香が、智彦の視界を襲い脳内がピンク色に染まる。

「んー、後二回ですよ？」

囁いた声は、あつさりとした響きだが、なぜか智彦の耳元で囁かれたように気がした。

「あと、二回・・・」

何がと考える暇もなく、睾丸が締め付けられる。

促されるように、智彦は無意識に呼吸と同時に下半身に力を込めていた。

「おもしろいの元、どんどん、集まってきました」

言いながら、睾丸が引き絞られていく。

「限界まで高まったら」

囁き終わると、左手がゆつくりと開いていく。

「こつちに集まる」

同時に会陰を指先でカリカリと引っ搔いていくと、ペニスの根元へと快感が移動する。

「はい、のぼっていく」

急に、会陰に爪を立てて食い込ませた。

それがトリガーとなり、どんどんと竿に向かって快感の元が逃げる。

「あつ、で、出る」

逆り一步手前、イってしまいそうな自分で出す時に感じる、いつもの感覚に智彦は叫んだ。

「まだ、透明かな」

しかしそんな、焦ったような智彦の言葉とは裏腹に、風香は冷静にそうつぶやいた。

言葉と同時に、びゆるびゆると透明な液が先端から噴き出した。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

「な、なんで？」

自分では、出ると思った射精感が、ギリギリで焦れに変わり、同時に先走りかとびだした。

自分の知らない、生理を完全に風香に予測されたことに、軽い恐怖を感じる。

疑問と共に智彦の呼吸が、吐き出され、先汁が飛び出ている最中に、睾丸が今までで一番強く、引っ張られた。

「いひっ」

痛覚すら覚える、衝撃に汗がじわりとふき出した。

ギリギリと上へひっぱられ股間全体が、持ち上がる。

まるで、おしめを替える赤ん坊のような恰好になった智彦のお尻の下に風香のひざがさらに奥に差し込まれた。

お尻の穴までみえる恥ずかしい恰好、しかし睾丸の痛みに抵抗ができず、強烈な羞恥だけが、智彦を襲った。

そんな姿に、風香は、目を細めて薄く笑う。

「かわいい・・・」

そう小さく呟くと、睾丸を絞りながら、肛門の周りを右の人差し指で、円をえがくようになでた。

「そ、そこは、やめ」

「冗談ですよ」

なにか、やばいアブノーマルなものを感じて声をだした智彦に風香はあっさりと指を撤退させた。

「ふーっ、と息をかけてみる」

安堵した智彦の肛門に、いたずらっぽい言葉と共に、冷たい吐息が吹きかけられた。

「やめっ」

「あっ、はねた」

吐息とともに、ペニスがひくついたので、風香が見逃さずにからかった。「でも、ここはまあ、今日は・・・」

唇をなめて、小さく呟いた風香の言葉は智彦の耳には届かなかった。

風香は、睾丸を強く握りしめたまま、腰の角度を少し戻した。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

「そろそろ、老廃物、漏らしちゃいましょうか」

そう囁くと、風香は左手の陰嚢を、ぐちゅり、ぐちゅりと揉み込んでいった。

同時に右手で会陰部に爪を立てて盛り上げるように肉を挟んだ。

左手で睾丸の玉を何度か転がした後、ゆっくりと手を緩めていった。

「は、ひゃう」

睾丸が解放され、会陰に性感が集まってくる。

すると、風香は会陰を掴んだ右手を、軽くねじるように揉んでから、最後に爪先を食い込ませて揉みだいた。

睾丸の下の会陰を中心に爆発するように、強烈な快楽がはじけた。

ペニスの根元で起きた快楽の爆発それが、尿道に到達すると、風香の左人差し指の先が、一本その根元を押さえつけた。

風香は遊ぶように人差し指一本で睾丸とペニスの境をグリグリと揉みほぐした。

「あ、あう」

ペニスへと向かう快楽の高ぶりを、ため込むように指先一本で食い止める。その感覚に視線をペニスの根元に向けた智彦に白い指がゆっくりと動いた。

風香の指が、先導するように、智彦のペニスの裏側、裏筋をジワジワとなぞっていく。

焦れるようにゆっくりとペニスの先に、あがっていく。

尿管をつぶすように押さえながら逆りをせき止めつつ指が精液を先導していった。

ペニスの先、亀頭に到達した指先は、素早く包皮の周りをなでた後、先端の鈴口を指先で押さえつけた。

「あつ、もつ、でです、」

頭に白いもやが、渦巻く智彦は出そうなギリギリの感覚を長く味わっていた。

もはや、限界のぎりぎりのところで。

「ふふっ、はいどうぞ」

風香が指をはなした。

「あつ、ううううう」

びゅうと音がしそうなほどの勢いで、精液が噴き出した。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

仰向けにねる、智彦の首近くまで精子が飛んでくる。

二度三度と胸元に、精液をかけて、その後トロトロと白い液が流れる。

風香は勢いをなくした。ペニスの包皮をつまむと、持ち上げた。

おへそ近くにトロトロと流れる精液。

「はい、まだ出ます、おもらし、トロトロ」

言いながら、鈴口を小指の先でくすぐるとさらに促されるように、白い液体がこぼれ落ちてきた。

指をはなした、風香がさらに陰囊をつかむと、もにゅもにゅと揉み込んだ。その動きに合わせるように、精液がどんどん流れ落ちていく。

「あ、あうう」

「気持ちいいですか？ いっぱいたまっていますね、老廃物」

からかうように言いながら、ペニスを見つめる風香は、精液の流れる量を見ながら、皮袋を強く引っ張り、優しく玉だけを転がしたりしながら、巧みに放精をコントロールしていた。

睾丸の愛撫で射精をうながし続けるテクニクに智彦はその抗えない気持ちよさを受け入れるしかなかった。

しばらくすると精液の勢いがおとろえると、風香が、ぼつりと囁いた。

「はい、最後の一枚りだしきりますね」

「は、ひ」

言葉と共に、陰囊が強く手のひらに、ぎゅつと握りこまれた。

その勢いのまま、ぶびゅりと、最後の精液が絞り出された。

ようやく射精が収まると、風香は股間から手をはなした。

仰向けで、胸元まで精液まみれになり、右手で目元を隠しながら呼吸を乱す智彦の姿を見た風香が、着物の袖をつかんで身を震わせた。

「つと、だめ、だめ」

そう呟くと、風香はタオルを手を取った。

「お疲れさまです、タオル濡をらしてきますので、少しお待ちください」
そう言うと、脱衣室の方へと歩いて行った。

◇

「えっと、智彦さんどうでしたか？」

息も絶え絶えの智彦の身体を献身的にぬれタオルで拭いた後、タオルケツ

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

トをかぶせると、風香は声をかけた。

「こんな、気持ちいいの生まれて初めてです、正直怖いくらいに気持ちよかったです」

顔を背けながらそう返す、智彦に風香は見えないように拳をにぎった。

「最初の、マッサージが吹っ飛びましたよ」

そう呟く、智彦の耳に風香が口をよせて囁いた。

「じゃあ、また疲れたら、来てくださいね、お待ちしてます」

そんな色っぽい誘いの言葉に、智彦は股間が熱くなるのを感じた。

ごまかすように、答える。

「わかりました、でも次はさすがに、普通にお願います」

なけなしの理性をかき集め、常識人をふるまう智彦に、風香は微笑みながら、何も言わなかった。

「え？、なんで無言なんですか？ ちょっと風香さん？」

「今日ありがとうございます、あ、ここは閉店まで使っているのでゆっくりしてってください」

そう言っ、ぺこりと頭をさげると、風香が立ち上がる。

「ちよっ、待ってください、次も、え？」

慌てる智彦を背後に残して、風香は、個室温泉を後にした。

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

癒やし処『風月』～愛情漏らし風香編～

ここまでが、未編集の一章になります。

製品版は全五章で、約10万字を予定しております。

よろしかったご購入検討下さい。

式 フロン